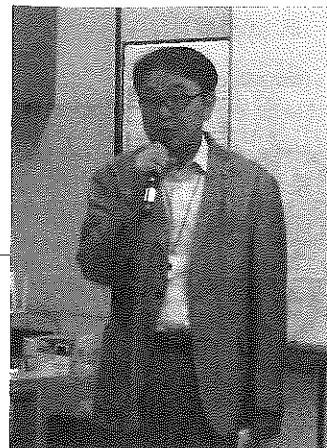


被災地から高品質野菜

青果育種研・第152回品種見本市

熊本 多数の来場者でにぎわう



講演する中原採種場・諸岡議研究開発部長



情報交換を活発に行う参加者たち

青果育種研究会（宮本修会長）は九州農政局と共催で5月20日、第152回品種見本市を熊本公設地方卸売市場で開いた。全国5位の野菜出荷の大産地・熊本を抱える市場は、4月14日の熊本地震の翌日から市場を開

「西日本フレッシュフーズの取組について」と題した講演を行った。諸岡氏は「伝統野菜と新規野菜について、からし菜を例に挙げながら、その区分けについて

は見直しが必要ではないかと提言した。「葉ネギの連続刈り取りにおける収量に影響を及ぼす品種特性」について、業務・加工用の葉ネギの需要が60%を超えているが、またそれに適した品種が見当たらないと指摘した。一方、志賀氏は6次産業化に関わる西日本フレッシュフーズの取り組みについて話した。

当日は気温が上がり夏日となったが、セリ場で見本市は風も通り、気温は比較的過ごしやすかった。各社とも熊本をほじめとする西南暖地で栽培された青果物を主として持ち込んだ。被災したにも関わらず素晴らしい品質に来場者は実際に手に取り、驚きの声を上げていた。

出展した種苗メーカーは次の通り。
 ▼朝日工業▼カネコ種苗▼サカタのタネ▼住化農業資材▼タキイ種苗▼トーホク▼ナント種苗▼萩原農場▼パイオニア▼コサイエンス▼福井シード▼丸種▼武蔵野種苗園▼八江農芸▼横浜植木（詳細については次号で紹介）

設、当日のセミナー、品種見本市にも約100人が参加するなど、前向きな雰囲気のみながっていた。
 セミナーは中原採種場の諸岡議研究開発部長が『からし菜「伝統野菜」と「新規野菜」』『葉ネギの連続刈りにおける収量に影響を及ぼす品種特性』、西日本フレッシュフーズの志賀泰友代表取締役社長が

日本種苗新聞

平成 28 年 6 月 11 日付